

ハンドボール競技のゲーム分析の結果とプレイヤーの認知の比較

西原 鈴音(広島大学)

1. 目的

本研究では、ハンドボールのゲーム分析の結果とそのゲームに対する選手の認識について両者の間に違いがあるかを明らかにすることを目的とした。また、この研究で得た知見をハンドボールの競技力の向上の一助とする。

2. 方法

- 1) 対象者：中四国 I 部リーグに所属している、国立大学 A 大学の女子ハンドボール選手 7 名と学生コーチ 1 名
- 2) 調査内容：A 大学の中四国リーグ戦全 4 試合のゲーム分析と A 大学の選手・コーチへのアンケート調査
- 3) 調査方法：ゲーム分析とアンケート調査の比較をした。

3. 結果と考察

1) ゲーム分析の結果

全 4 試合分における 1 試合あたりの全体の評価を表 1 に示した。他の大学と比べると、シュート成功率とミス率の部分で大きな差が見られた。

表 1 全 4 試合における 1 試合あたりの全体評価

	A
総攻撃回数	64.3 (±4.4) 回
シュート数	43 (±3.9) 回
シュート到達率	67.2%
得点数	12 (±3.5) 点
シュート成功率	27.5%
ボール保持ミス数	14 (±4.8) 回
規則違反	9 (±3.7) 回
ミス率	35.6%

2) アンケート調査の結果

シュート成功率やミス率の割合についてアンケート調査を行なった結果を表 2 に示した。シュート成功率の部分では、人によってばらつきが大きかった。ミス率の部分では、全体的に回答内容が一致していた。

表 2 シュート成功率・ミス率の割合と 5 段階評価のアンケート結果

	シュート成功率		ミス率	
	割合	5 段階評価	割合	5 段階評価
平均	36.3%	2.6	39.4%	1.9

3) ゲーム分析とアンケート調査の結果の比較

ゲーム分析の結果とアンケート調査の結果を比較すると、個人に応じて、回答内容にばらつきが見られるが、チーム全体で見ると、両者の間に大きな齟齬はなかった。

しかし、試合結果に選手の認識の良さが反映されていないことから、選手同士・コーチと選手の間で、一人ひとりが持っているチームに期待するプレーレベルの基準が異なっている可能性がある。このような問題を解決するためには、普段の練習からコーチと選手で認識のすり合わせを行い、選手が主体的にプレーできるようにしていくことが大切であると考えられる。一人ひとり、異なる主観を持っているので、選手同士でも場面に応じて、お互いがどのようなプレーを行いたいかを確認し、共通認識を持てるようにしておくことで、個人戦術からグループ戦術、チーム戦術へと変化していき、攻撃や防御のバリエーションを増やすことができる(八尾・高野, 2011)。

4. 結論

本研究では、ハンドボールのゲーム分析の結果とそのゲームに対する選手の認識について両者の間に違いがあるかを明らかにすることを目的として、シュート成功率とミス率を中心に調査を行なった。ほとんどの選手が客観的に分析を行っていたが、試合の結果には結びついておらず、選手・コーチ間の認識に差があることが示唆された。この問題を解決するためには、普段の練習からコーチと選手で認識のすり合わせを行い、選手が主体的にプレーできるようにしていくことが大切であると考えられる。選手が試合中に共通認識を持ってプレーできるようになれば、意図通りに、試合中にプレーを修正して試合の流れを変えたり、勝負所で点を取れるので、試合のパフォーマンスを上げることが出来る可能性がある。

5. 主な参考文献

- 1) 八尾泰寛・高野亮(2011)ハンドボール競技のゲーム分析：得点パターンからみたゲームの流れについて. 東京女子体育短期大学紀要, 46 : 11-19.